

情報の制約が集団意思決定過程に及ぼす影響

2040757 池本 祥周

1. 研究の背景と目的

グループで話し合いを行う場合、ジャンケンやくじ引きなどによる決定や、各メンバーの能力や事情を考慮した決定が行われることがある。前者はランダム情報を利用した意思決定であり、後者は個人情報を利用した意思決定であるといえる。本研究では、これらの情報の利用に制約がある状況において、人々がどのようにお互いの情報を獲得したり、利用したりして意思決定を行っていくのかについて検討する。

本研究では、ランダム情報や個人情報が制約された状況として、匿名でのコンピュータを介したコミュニケーション(CMC)を利用する。CMCでは、相手の姿が見えないため、公平性を保ったままランダム情報を使うことは難しく、個人情報も獲得できない。また、匿名で議論するため、メンバー自身が提示しなければ一切の個人情報は得られない。さらに本研究では、特定のメンバーに不利益が生じる課題を設定する。先行研究では、主に架空の状況を想定した課題を用いており、意思決定がメンバーの利益や不利益にならないものだった。しかし、そのような課題では、メンバーの本当の意志や希望といったものが意思決定の過程で出ない可能性がある。

以上より本研究では、ランダム情報の使用が困難で、かつ個人情報が遮断された CMC 環境が集団意思決定過程に及ぼす影響について、特定のメンバーに現実的に不利益をもたらす課題をとおして検討する。具体的な検討課題は以下の3点である。

- ・集団意思決定が成される方法とその方法が用いられた理由
- ・集団意思決定を行う上で用いられる個人情報の種類と提示量
- ・偽った情報(嘘)を使用するか否か。使用した場合、その嘘の種類と理由

2. 方法

被験者

A大学の学生15名が実験に参加した。被験者には自分と同じグループのメンバーが誰か分からない様、3人1組のグループを作った。実験は1

グループずつ個別に実施した。

課題

課題は、「この実験の謝礼金がグループのメンバー3人の内2人にしか支払えないため、3人の中で謝礼金を受け取れない人を1人、話し合いにより決めて下さい」というものだった。また、30分の制限時間を超えてなおその1人を決めることができなかつた場合は、メンバー全員が謝礼金を受け取ることができなくなると設定した。

装置・材料

CMCには、書き込み時間を表示させないよう設定した電子掲示板を使用した。各メンバーは別々の実験室で実験に参加した。各実験室にはビデオカメラを設置し、実験の一部始終を記録した。実験の説明はHTML文書に記載し、課題の遂行中に必要な情報は紙の説明書を用意した。

アンケート用紙は、意思決定、嘘、ランダム情報を主として尋ねる質問から構成されていた。電子掲示板のログの用紙は、アンケートの嘘に関する質問で使用された。

手続き

電子掲示板での話し合いは制限時間となるか、又はグループのメンバー全員が説明書に記載されている会話の終了条件を満たすまで続けられた。話し合い終了後にアンケートを記入してもらった。実験後、被験者全員に、意思決定の結果に関わらず、謝礼金を渡す旨を伝えた。また可能な限り、被験者全員にインタビューを行った。

3. 結果

分析方法

各被験者のグループ内での役割と意思決定過程の特性を分析するために、電子掲示板の全ての発言に対してタグ付けを行った。タグを付ける上で、発言内容、個人情報、嘘、意思決定方法の4つの項目・属性を設定した。発言内容には、自己主張、提案・質問、同意、拒否・批判、調整、ジャンケン、その他の7つのカテゴリーを設定した。個人情報は被験者の発言から抽出した。嘘は被験者のアンケートからその発言を判断した。意思決定方法は、立候補、謝礼金、ジャンケン、住居形態、

実験参加理由, アルバイト, 謝礼金額設定に分類した。

分析結果

各グループの意思決定結果を表 1 に示す。下線が引かれたアルファベットは、最終的に意思決定として用いられた方法を示している。

表 1 グループ全体の意思決定結果

グループ No.	1	2	3	4	5
意思決定時刻(分)	27	—	9	12	30
発言数	48	50	16	39	94
意思決定方法	a, <u>c</u> , d, e	a, b, d, f	<u>a</u> , b	<u>a</u> , b, g	a, b, <u>c</u>
意思決定結果	○	x	○	○	○
個人情報数	6	16	3	3	3
嘘数	0	1	0	2	0

a: 立候補, b: 謝礼金, c: ジャンケン, d: 住居形態, e: 実験参加理由, f: アルバイト, g: 謝礼金額設定

分析の結果, 集団意思決定を行う上で必要な個人情報に, 下宿生か自宅生, またアルバイトなど現在の立場や経済的な状況に関する情報と, 貯金や食費など謝礼金を得た時の使用目的といった仮想的収益がもたらす状況変化に関する情報の 2 つが用いられていることが分かった。

意思決定を唯一することができなかったグループ 2 の意思決定過程では, 同意や拒否・批判などの相手の意見や問い掛けに対する反応を示した発言が, 他のグループに比べて極端に少ないことが分かった。それに対して, 個人情報の提示量については, 他のグループと比べて極端に多いことが分かった。

嘘については 2 名の被験者を除いて全員が使用しておらず, 理由としてはその必要性がないと答えていることが分かった。一部で使用された嘘は, 自分だけが他のメンバーと立場が異ならないようにするために使われていた。

4. 考察

実験結果をふまえ, 検討課題について考察する。

意思決定方法と用いられた理由

本実験で使用された最終的な意思決定方法は, 立候補を挙げる方法とジャンケンによるランダム情報を使用する方法の 2 つであった。ジャンケンの使用が困難であるにも関わらず使用した理由として, メンバーとコミュニケーションを続けることにより自分の個人情報が相手に伝わることを恐

れるが故, 早めの決断を優先したことと平等性・公平性への固執が考えられる。

個人情報について

本実験で使用された個人情報には, 現在の立場や経済的な状況に関する情報と, 実験による仮想的収益がもたらす状況変化に関する情報が用いられていた。このことから, 意思決定をする上で必要な個人情報が, 被験者全員が共通している要因であることが分かった。個人情報を用いての意思決定方法には, 今現在お金が必要な人, またはその必要性が高い人という要因が, この課題において優先されることが分かった。またグループ 2 が意思決定をすることができなかった要因として, 相手の意見や考えに対し聞いているという反応を示さなかったことが挙げられる。その結果, 個人情報の提示量が多くなり, メンバーそれぞれに対し決定理由が作りやすくなったため, グループの意見をまとめられず意思決定ができなくなったと考えられる。

嘘について

被験者は嘘に対して比較的無関心であり, 考慮すべきことではないと捉えていた。これは自分が嘘を使っていない, あるいは自分が嘘をどう使えば良いのか分からないので相手もまた使っていないだろうとする主観的な憶測であり, CMC が引き起こすトラブルや犯罪の被害拡大に繋がる, 人々の偽の情報に対する認識であると考えられる。また被験者は, 例え相手が嘘を使っていたとしても, どう対処していいか分からなかったと話していることから, 偽の情報だとしてもその情報をただ受け取ることでしか対応できなかったことが明らかになった。このことから人々は, 偽の情報の存在を軽視する認識を改め, 嘘の可能性を考慮し, それに対し適切な対処能力を身に付ける必要があることが示唆された。

5. まとめ

本研究では, ランダム情報が使用し難く, 個人情報が遮断された CMC 条件が集団意思決定過程に及ぼす影響を, グループのメンバー 1 人に不利益をもたらす課題を通して検討した。分析の結果, 被験者は不平等・不公平におけるコミュニケーションの不可欠性に対して目を向ける必要があったと考えられる。今後の課題としては, 不利益の条件をさらに調整していく必要が示唆された。